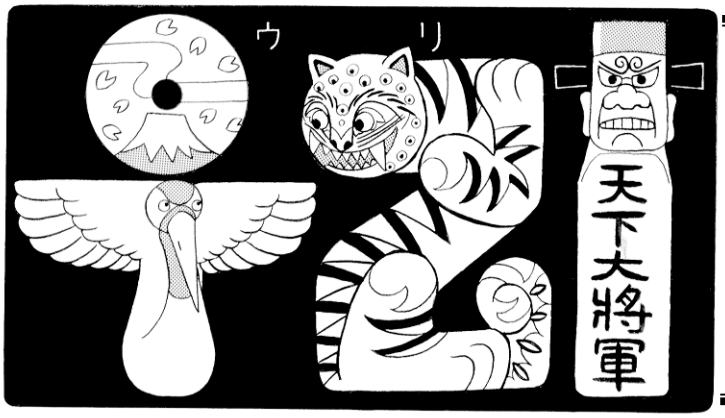


日韓合同授業研究会会報

第９４号

2014年10月10日発行

第 20 回交流会埼玉大会を終えて

藤田

「一人の子どもも切り捨てない教育～フクシマの子どもたちから見えてくるもの」をテーマとした交流会を終えた。私たちは、フクシマの子どもたちから見えてくるものが、子どもたちを切り捨てている教育状況であると考えて、今回のテーマを掲げた。住み慣れた福島を離れ、差別によるいじめに怯えて出身地を隠す子どもたちの実態さえ私たちはつかめないでいる。この状況は、この国の子どもたちに対するあり方を示していると感じる。交流会では、充実した議論が行われた。しかし、この議論の豊かさは、現実の教育をめぐる状況の厳しさと表裏になっている。

第１次政権で教育基本法を改定した安倍首相は、秘密保護法・集団的自衛権に続いて、改悪教育基本法精神の具体化として、道徳教科化などの施策を進めようとしている。学力テストは国、都、区と何度も行われ、子どもが目の前で傷つけられる姿を見てきている。教員組合を支えてきた世代が続々と退職し、精神疾患により休職・退職となる教員が後を絶たない。教員が子どもときちんと向かい合うことが困難になっている。このような中で「一人の子どもも切り捨てない教育」という 70 年代に使われたスローガンを、今こそ大切にしたいと考えたのである。

この「一人の子どもも切り捨てない教育」という言葉は、韓国の教員たちの心に響いた。セウォル号事件で痛む韓国の教育界もまた、この言葉を必要とする状況だったからであった。善元さんの絵本を子どもたちと読んだ小学校の報告、はみ出しがちな生徒と生きた高校の報告、セウォル号の話から語った学校カウンセラーの報告、そして、日本側からは福島からの転入生とのかかわりと、それぞれの報告から、「一人の子どもも切り捨てない教育」をめざし、時代の状況に抗っている教員の姿を見ることができ大きな励みとなった。そして、補助金打ち切りやヘイトスピーチの中で日々の教育を続ける朝鮮学校からの報告の爽やかさが参加者の胸を打った。

充実したフィールドワーク、久しぶりの会員や若い参加があったことなど嬉しいことも多くあった。ぜひ、報告書を読んでいただきたい。

目次

第２０回交流会を終えて ・・・・・・　１
道徳の教科化の意味・・・・・・・・・・２
第２０回交流会・授業報告
「公教育の現場で感じる『一人も切り捨てない教育』の意味」・・・・・・・・・・・４
第 20 回交流会　韓国側の感想・・・・１２

道徳の教科化の意味

大森

背景にある 15 教育法

第 1 次と第 2 次の安倍政権下の国会において、15 の教育関係法が成立している（表 1)。15 の法と関連施策には次の特質がある。第 1 は、財界のグローバル人材要求に直線的に対応した法と施策になり小・中・高・大に影響を与えていること。第 2 は、小中学校の子どもたちを対象にして愛国心教育と道徳教育を強化する法と施策になっていること。第 3 は、公立学校の民間委託を求める財界の要求に一定の対応を重ねた法と施策になっていること。第 4 は、原発災害下の子どもの窮状を改善するための法と施策を欠落させていることだ。

愛国心と道徳の重視

第 2 の特質に論点を絞ってみたい。この間､安倍政権による愛国心教育と道徳教育の強化策は、矢継ぎ早に進められてきた。改正教育基本法における愛国心教育規定（表 1 の法律①)、一部改正学校教育法における愛国心教育規定（法律④)。いじめ防止対策推進法における道徳教育充実規定（法律⑦)、歴史教科書の統制に関わる検定基準の改正（2014 年 1 月 17 日)、教科書の採択に関わる統制の強化（法律⑩）などだ。

安倍政権が愛国心教育と道徳教育を重視しているのは、憲法 9 条の形骸化を進める軍事的政策との関連もあるが、第一義的には、格差拡大と能力主義がもたらす人々の不満が体制への批判に発展することに危機感を抱き、体制を維持するイデオロギー形成の役割を期待しているからだ。格差の拡大を背景にして、政権が両者に寄せる期待はかつてないほど強まっている。

中教審の道徳審議では

本年 2 月、文部科学大臣は、「道徳に係る教育課程の改善等について」を中央教育審議会（中教審）に諮問して次のことを求めている。(1) 小中学校における「道徳の時間」の位置づけを「特別の教科　道徳」(仮称）に変えるため学校教育法施行規則を改正すること。(2) 現行の「道徳の内容」小学校 22 項目（第 21 が愛国心）と中学校 24 項目（第 23 が愛国心）を拡充するため学習指導要領を改訂すること。(3)「特別の教科　道徳」に検定教科書を導入すること。(4)「特別の教科　道徳」に評価を導入するため小中学校の指導要録を改訂することだ。

中教審では 9 月 19 日に道徳教育専門部会における 10 回の審議を終えた。さる 9 月 30 日の中教審（第 93 回）で答申案が審議されたことを受けて、10 月末に中教審（第 94 回）が開かれ同日に答申が出される見込みだ。

今やるべきことが 2 つある。1 つは、筆頭教科「修身」を通じて行われた戦前日本の道徳教育が人々に何をもたらしたのか、歴史事実を検証することだ。この課題に中教審は取り組んでいない。国は子どもに「義勇奉公」(教育勅語の最重要徳目）の道徳的価値の強制を重ねたが、事実の検証を欠落させたまま、戦後の施策を進めてきた。2 つは、問題の大きさに対応した報道・分析・提言を教育現場の側から重ねることだ。必要な議論はまだ始まってさえいない。

（中教審道徳教育専門部会 9 月 19 日大森撮影）

表１　安倍政権下で成立した教育関係法
国会次（会期）

	名称　　※・・議員立法	内容
165 国会（2006.9.26－12.19）		
①	教育基本法	教基法の全部改正／教育目的に「我が国と郷土を愛する」を新設し教育振興基本計画を規定
166（2007.1.25－7.5）		
②	構造改革特別区域法の一部を改正する法律	他施設との一体的利用で学校管理執行を首長に委譲
③	国立大学法人法の一部を改正する法律	大阪大学に大阪外国語大学を統合
④	学校教育法の一部を改正する法律	教基法改正に伴い義務教育目標に愛国心規定／副校長・主幹教諭・指導教諭の新設／学校評価導入
⑤	地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律	保護者を教育委員に／同一市町村内の教職員転任を市町村が内申／文科大臣の是正要求と指示
⑥	教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部を改正する法律	教員免許更新制導入／指導が不適切な教員に指導改善研修
183（2013.1.28－6.26）		
⑦	いじめ防止対策推進法　※	いじめ防止基本方針策定や道徳教育充実
185（2013.10.15－12.8）		
⑧	公立高等学校に係る授業料の不徴収及び高等学校等就学支援金の支給に関する法律の一部を改正する法律	就学支援金に所得制限／公立高の授業料不徴収制度を廃止し公立校生徒にも就学支援金を支給
⑨	国家戦略特別区域法	1年以内に公立学校管理の民間委託化の措置
186（2014.1.24－6.22）		
⑩	義務教育諸学校の教科用図書の無償措置に関する法律の一部を改正する法律	採択地区協議会の決めた教科書の採択を市町村に義務化／採択地区単位を市郡から市町村に変更
⑪	私立学校法の一部を改正する法律	法令及び寄付行為を違反した私立学校に措置命令
⑫	地域の自主性及び自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律	教職員定数・学級編成の権限と給与負担を都道府県から政令市に委譲
⑬	地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律	教育委員長と教育長を一体化した新教育長。首長が総合教育会議を主宰し教育行政大綱策定
⑭	学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律	教授会諮問機関化／国立大は、経営評議会の学外委員は過半数、学長は選考会議の基準で選考
⑮	学校図書館法の一部を改正する法律　※	学校図書館職務に従事する職員を学校司書に

第１次（2006.9.26－2007.8.27）と第２次（2012.12.26～）の安倍政権下関係法を収録（作成大森）

公教育の現場で感じる「一人も切り捨てない教育」の意味

イ（李）

Ⅰ．　はじめに

「一人も切り捨てない教育」とう言葉は定言命令だ。少なくとも教育者なら誰もが否定できず、当然そうあるべき当為的な価値だ。

すべての生徒を尊い存在として扱い、競争ではなく協力を通じて各々の素質と能力を最大限発揮させる理想の教育的原則だ。

最近、この言葉は教育現場の重要な話題となった。特にセウォル号の事故以降、一層注目されることとなった。なぜなら最後の一人まで救助すると言っていたパク・クネ政府の決意にもかかわらず、生存者をたった一人も救えなかったからだ。むしろ事故後の救助過程での政府の混乱と無能は、一人も救助できない韓国社会の惨憺たる水準を確認させるだけだった。こうした認識が拡がるなか実施された自治体の教育監選挙（６．４）は、「一人も切り捨てない教育」をモットーとした進歩（左派）陣営の教育監の圧勝に終わった。一人も救えなかったことを恥じ、悔い、怒った結果が反映されたのだ。

しかし進歩陣営の教育監が大挙当選し、今さら大統領が「国家改造」を声高に叫んでも、現実は特に変わりそうにない。一度はだまされても二度はだまされない。政治家の公約とスローガンで世の中を変えられると信じる純粋さと愚かさはすっかり消えたようだ。韓国社会で「おとなしくしていなさい」という言葉は、これ以上どんな権威も発揮できない。「おとなしくしていない」という決意と自らができる実践だけが意味があるということを、これまでの経験で十分に学習したからだ。

では、公教育の現場にいる教育者の立場で「一人も切り捨てない教育とはどういうものか！」という悩みは、「私は一人も切り捨てずに生徒たちを教えてきたか？」という避けがたい自問へと続く。韓国の高校は現在 2,832 校で、毎年大学進学のため「大学修学能力試験」を受ける生徒数は 65 万人程度だ。相対評価制度になっているため、いくら頑張っても成績順に 1 等級から 9 等級までに等級分けされなければならない。1 等級を取れた生徒(62 万名基準、24,800 人)でも志望する SKY(ソウル大、延世大、高麗大定員 11,216 人）に入れないので毎年 1 等級の生徒の 40%が浪人している状況だ。12 年の学校生活を終了しても 13 年めに再学習を繰り返した後ようやく大学に入学することができるのだ。

入試中心の加熱する競争の中で成績が落ち、勉強に興味を失った生徒たちに私が教える「物理（Physics)」の授業はどう受け入れられただろうか。勉強ができずに問題ばかり起こす生徒たちにどう対処してきただろうか。

果てしない自問自答と主張と弁解が頭の中をかけ巡るなか、二人の生徒の顔が思い浮かぶ。３年前、 安山（アンサン）の常緑（サンロク）中学で出会った生徒、勉強ができないどころか、常識がまるっきり違う社会で生きてきた脱北少年のナムヒョク（仮名・男・15 歳)。そしてもう一人は 2012 年に安養のチュンフン高校で出会った反抗する青春のすべてを見せたテヨン（仮名・男・18 歳)。この二人についてお話ししようと思う。私の能力と忍耐力と認識の果てに出会った子どもたちとの体当たりの記録を通じてその答えを求めるのが、もっとも「物理的」な方法だと考える。

Ⅱ．脱北生徒の適応過程：「事前に体験する統一」ナムヒョクの話

１．個人の人生に刻まれた民族の歴史

脱北生徒のナムヒョクを通じて韓国社会が歩んできた過去と圧縮された成長過程、そして未来を見ることができる。座って勉強する態度や教師に接する態度、考えなどは、まるで 1960～70 年代の韓国の生徒を見るかのようにきわめて丁寧で礼儀正しく、意欲的で積極的だ。反面、厳しい脱北過程を経て韓国に来る際にできた心と体の傷は言い尽くせないほど深く、入試競争の激しい韓国の慣れない教育風土に適応するのもかなり難しそうだった。ナムヒョクが私のクラスに入って生活しながら見せた様ざまな姿は、将来、南北が統一して共生する「前もってやってきた未来」のような気がしたため、たくさんの時間を割いてこの過程を記録する作業を行った。

脱北青少年が韓国社会に適応する過程でもっともつらいのが、「カミングアウト」だ。「北朝鮮から来た」という事実を明かすのはたいへん勇気のいることだ。南北が長い間対峙する状況の中、韓国社会で「北朝鮮」とは共に生きるべき「同胞」であると同時に、打倒すべき「敵」だからだ。その誤解と混乱を受け入れなければならないのが「カミングアウト」であるから、韓国社会で生きる脱北青少年の多くはこの事実を隠している。

しかし抑揚や言葉遣い、常識や価値観も違うため、いつまでも隠していられないだけでなく、ばれることを恐れて気を遣うことにエネルギーを使い果たすまで放っておくことも教育上よくないと思い、明かす方向に持っていくことにした。

まず、ナムヒョクに北朝鮮出身であることを明かすことについて意向を聞いてみた。ナムヒョクにカミングアウトした場合の状況を説明し、明かせば学校生活がずっと気楽になるだろうと話した。本人が勇気を出して明かすつもりなら、その点に関しては担任として最後まできみを守ると約束もした。

ナムヒョクは迷うどころかむしろ快く明かすと言った。たいへん積極的で政治的な性格を備えた子であることは間違いない。こうした性格が本人の学校生活への適応にたいへん役に立ったようだ。緊張の当日、私は友だちの前でその話を切り出した。ナムヒョクのカミングアウト！

「今日は私から君たちに話があるの。スビン、ちょっと前に出てきて。このクラスは初めは他のクラスのように 38 人だった。そこにスビンが釜山（プサン）から転校してきた。」

「わ！プサン。」

「プサンと言えば何が思い浮かぶ？ロッテのプロ野球チームは知ってる？」

「はい。〈海雲台（ヘウンデ）〉という映画もあります…。」

「イ・デホ選手と似ていない？スビンはヘウンデに住んでたのよ。」

「わ！ヘウンデ…。プサン弁で話してみて！」

生徒たちは好奇心を示し、方言が聞きたいと大喜びだった。そんな雰囲気のなか、もう一人いると言いながらナムヒョクを呼んだ。生徒たちは「あの子はどこからか来たんだろう」と目を輝かせながらナムヒョクを見た。

北朝鮮から来ましたとカミングアウト

「ナムヒョクはどこから来たの？」
「平安南道の徳川(トッチョン)です。」
「わ！北朝鮮だ。」
どの生徒も知りたくてしょうがないとでもいうように、たくさんの質問を浴びせた。
「北朝鮮から直に入国したの？」
「いいえ。３年前に北朝鮮を脱出して」
「うわ！脱出！」
「じゃあナムヒョクの話を聞いてみようか。」
「はーい。」

ナムヒョクは単に食糧難で北朝鮮を脱出したのではなかった。両親の離婚による複雑な家庭の事情のためだったが、本人のつらい過去をはばかることなく全て友だちの前で話した。両親の別居の過程と離婚、中国での生活などについて、むしろ聞いている私のほうが「こんなに個人的な話を簡単に聞いてしまってもいいのか」と申し訳なくなるほど、詳しく話した。ところが生徒たちは「３ヶ国語を話せるグローバルな人材だ」、「中国語が上手でうらやましい」などと、予想に反してたいへん明るく希望に満ちた雰囲気の反応を見せた。世代の違いを実感した。よくわからないがための反応だとも言えるが、このような雰囲気が韓国社会の現在の姿のようだ。

最近の子どもたちをせわしなく注意力が散漫で、軽薄で常識がないと案ずる視点が多いが、こうした心配な点は一方では先入観がなく明るく、さっぱりしてクールな姿だとも言える。あれこれと色眼鏡をかけずにクールに受け入れる姿が新鮮に思えるほどだった。生徒たちには、こうした軽ささえ前向きなエネルギーに変えられる無限の可能性があるようだ。生徒たちには教えるどころか毎日学ぶことのほうが多い。

２．教育の統一の準備

60 年以上にわたる南北の断絶は、生活のあらゆる領域での違いを作りあげた。特に同じ民族であることを確認するもっとも確実な手段である言葉でさえ、徐々に違っていっている。脱北少年を教えることは民族の断絶を確認し、発見する良いきっかけになった。すなわち、教育の領域での統一を準備するということである。

ナムヒョクの１学期の期末テストの採点中のことだ。これまでに見たことのない単語が答案用紙に書いてあった。単語がたいへん目新しく奇妙だったため、しばらく読んではまた読みを繰り返した。出題された問題は叙述型問題で、「シャルルの法則」が適用される日常生活での例を探して叙述するものだった。ナムヒョクの答えは**「ジェンゲビに水を入れて蓋をして加熱すると、蓋がカタカタいう。熱を加えると、または温度を上げると」**と書かれていた。大体の意味は理解できるが、正確な採点のためにインターネットの検索が必要だった。初めて見る「ジェンゲビ」という単語があったためだ。見慣れない単語を私はすぐに携帯電話で検索した。**「鉄やアルマイトなどで作った鍋」**と出た。これと似た答えを書いた生徒が何人かいた。互いに見比べながら、統一したら教師は単語を検索するためスマートフォンが必須だと思った。南北の言葉の差を示す、おもしろく意味のある体験だった。

３．共感能力の優れた生徒たち

韓日合同教育研究会の日本の会員から 2011 年､横浜市の歴史歪曲教科書採択阻止に韓国の教師たちも参加してほしいと署名を求められた。研究会のホームページを見ながら、今日は生徒たちにこの話をして一日ぐらいは考える時間を与えようと思った。朝の自習時間にホームページからダウンロードしたフォーマットを手に教室に入り、横浜から届いた教科書採択に関する要請内容を読み、一日考えて参加すべきだと思うなら署名するよう伝えた。ただし、すべての署名は自らの考えと信念からのものでなければならないことを強調しながら終礼後に集める旨を伝え、署名用紙を配った。

生徒たちはその日に提出しなければならない宿題のために、ややざわついた雰囲気で聞いているような、いないような様子だった。しかしそんななか、目を輝かせながら耳を傾ける何人かの生徒の視線を感じた。終礼後、朝に配った署名用紙の提出を促すと、生徒たちは急に思い出したかのように慌てて紙を探しはじめた。私の意に反して生徒たちは悩んだ様子もなく、その紙がどこに行ったのかもわからず互いに「僕は持っていっていない、〇〇が持っていったんだ」と騒ぎながら、責任転嫁し合った。

いくら幼いと言っても 14 歳にもなって社会に対する問題意識を持てないのか､私の力が足りないせいではないのかと、自責の念まで起こり、失望し憂うつだった。そんな気持ちを抑えて「紙がなくてもいい､大丈夫｡」と言うと､教室の片隅から　「ここにある」と一枚の紙が回ってきた。40 人中４人の生徒だけが署名して出した用紙だった｡朝にも教室のどこかで強い視線が感じられたが、それはまさしく脱北生徒のナムヒョク、母親が日本人のヒョギュ、そして祖母と二人暮らしのジュンホ、片親家庭のテスだった。

2011 年度教科書採択に関する要望書

私は一瞬、妙な感動を覚えた。５年間、脱北と多文化教育に携わり「この子どもたちは韓国社会にとってどんな意味を持つのだろう」､「子どもたちにどんな意味があって私はこの仕事をしているのだろう」と悩み続けてきた。しかし、小さな糸口が見つかったような気がした。人は誰もが自分の直・間接的な経験が結び付いて初めて、自らの問題として認識する傾向がある。
署名した生徒たちは脱北や多文化、疎外階層など社会的少数者（minority）という共通した背景を持った子どもたちだった。本人が望もうと望むまいと、特異な経験と特別な存在として社会的な問題を敏感にとらえざるをえない立場だ。署名用紙に署名できたのは、他の生徒には「自身の問題」ではなく「社会問題」に過ぎないが、この生徒たちには「社会問題」であると同時に「自身の問題」に感じられたためではないかと思った。他人の苦しみを自らの痛みとして感じる共感能力こそ彼らの最大の強みであり、同時に韓国社会の希望と言えるだろう。つらかった自身の経験にとどまらず、他人の苦しみに敏感に反応する彼らの「悲しい能力」を通じ、私たちも成熟できるきっかけを作れるからだ。

Ⅲ.　勉強を放棄した反抗児テヨンの話

１．誰も止められない学校の悪童、テヨン

テヨン（仮名・男・18 歳）は、全校生徒と教師に悪童として知られている。一日も置かず授業を妨害して職員室に呼ばれ、指導を受けていても荒っぽい言葉で怒りを爆発させる。指導を受けて職員室を出る際、扉が外れるほど強くドアを閉めて出て行くなど、耐えがたいほどの過激な姿に教師と生徒たちは悩んでいた。不遜で激しい行動によるペナルティ・ポイントが重なり、善導と懲戒はもちろん、保護者面談や専門的な相談などを実施してみたものの、意味がなかった。始

業ベルが鳴った後に教室に入ってきながら、横柄な態度で視線を集めて授業の雰囲気を壊し授業をめちゃくちゃにすることが増え、同じクラスの生徒からもテヨンのせいでつらいという意見が出始めた。しまいにはクラスの生徒たちが「テヨンのせいでクラス全員が授業をまともに受けられず、たいへん困っている。学校側が積極的に対処してほしい」といった内容の手紙を学校の悩み相談箱に投じ、受理される事件が発生した。同じクラスの友だちに告発されたのだ。

この一件でテヨンはプライドを傷つけられ、家で両親に学校をやめると言い張った。テヨンの母親と何度も面談し、クラス全員の前で公開謝罪ならびに二度としないという決意表明をさせることで合意した。

テヨンは会話の中で、相手のちょっとした言葉尻をとらえてしつこく問題を追及することに長けて（？）いた。また、何かあればすぐに教育庁に報告すると口癖のように言う子どもだった。被害妄想がひどく、本人の考えを相手にしつこく押し付ける形で表出させるため、ほとんどの教師は恐いというより相手にするのが嫌で、またはかかわりたくなくてできるだけ避けようとした。テヨンの両親の性格も子どもと似ていた。テヨンの母親は、何かあるたびに携帯電話で母親に学校に来て解決するようわがままを言うテヨンをとことん受け入れ、その行動を煽った。テヨンの母親は、テヨンのすべての問題行動が父親のせいだと考え、権威的な父親をたいへん恨んだ。ほとんどの問題行動の原因が家庭にあるように、結局はテヨンの家も夫婦問題から子どもの問題行動が起こっているように見えた。このようにテヨンは真っ先に切り捨てたい生徒だった。

２．果てしない問題行動の中で

ある日、生徒部に電話がかかってきた。テヨンが自転車置き場で３年生の自転車に乗ってたばこを吸う姿が防犯カメラに映っていたが、車輪が壊れたため弁償してほしいとのことだった。ただでさえ、テヨンが教室のテレビを倒して完全に壊し、教頭先生に事情を説明、担任として指導が足りないとお叱りを受けて学校側と和解しようとしていたのに。この問題が解決する前にこうしたことが起こったのだ。どうしたらこんなにひっきりなしに問題を起こせるのだろう。できるなら今すぐにでも強制的に転校させたいという気持ちがテヨンを見るたびにわき起こり、私自身も感情をコントロールするのがたいへんだった。

テヨンを呼んで３年生に弁償しなければならないと伝えると、飛び上がって、できないと言った。「喫煙は認めても、僕が自転車に乗っただけで壊れたとどう証明するのか」と、強く抗った。絶対に弁償する気はなく、テヨンの母親も同じことを言った。本当にどうすればいいかわからなかった。何度も面談をしたが、本人が自転車修理場に直接行って調べてみる、悔しい、などと言いながら、放課後に話そうと言っても残らず、話せないまま数日間、何かと理由をつけて解決する意志を見せなかった。何日も同じことを言ってやり過ごしたが、ついに呼び出してじっくりと私の考えを伝えた。

「テヨン、まずはテヨンが許可なくひとの自転車に乗って、その事実が防犯カメラに映っていた。だから１次的な過ちははっきりしているね。これはきちんと認めないといけない。もともと50％壊れていて、テヨンがその上に乗ったためにあとの 50％が壊れたとしても。ここはそういう経済論理をもって追及する場所じゃない。他人の自転車に許可なく乗ったことが間違っていたという道徳的な価値を優先させて教える学校だから、壊したのが 50％だけだとしても道義的な責任はテヨンにある。だから先輩が求めれば悔しくても弁償するのが筋だと思う。今日一日時間を与えるからよく考えてみなさい。もしいくら考えても悔しくて絶対に弁償できないと言うなら、私もこれ以上は何も言わない。この後は生徒部に任せるから、先輩のご両親を呼んでお母さんと先方と話し合って解決しなさい。」

次の日、数日間避けていたテヨンもその母親も、そこまでしたくなかったのか 13 万ウォンを

３年生の先輩に渡し、この件は一段落した。解決までに二週間かかった。何事もすぐに受け入れられず、気を楽にして世の中を渡れない子ども、自らの経験でのみ判断して行動する子ども、周りを疲れさせ、騒ぎの中心にいる子どもがテヨンだった。

常に起こる小さな問題への対処法として、事ある毎に細かく記録して子どもの行動をまとめ、適切に活用することにした。次に問題を起こした場合にはこの記録を武器として示し、度重なった場合には学校の規則どおり処理すると脅し（？）ながら雰囲気を誘導した。クラスに男子生徒が多いため喫煙者も多かった。喫煙指導がたいへんなのは、時間さえあれば隠れて喫煙するため、あらゆる理由をつけて教室に入る時間が遅くなり、そのため授業の雰囲気が壊されることだ。また、終礼後には早く学校から出ようと終礼事項を適当に聞いて出ていってしまうため、どうしても学校生活に忠実ではいられない。

喫煙しては保健室に行ってきたと嘘をついて朝礼に遅れる場合にも、保健室に電話して実際に行ったのかを確認し、保健室の記録をコピーして個人ファイルにまとめた。言い訳をするたびに細かくまとめた資料を見せながら嘘に対する指導を続けた結果、何事も適当に流す担任ではないと認識したのか、生徒たちは緊張しながら生活し、担任にも不遜に接することが大幅に減った。テヨンの喫煙量は一日一箱ほどとのことだった。一日のほとんどを過ごす学校での禁煙は耐えがたかっただろうし、過剰な行動や怒りをコントロールできないのも禁断症状のために起こる行動と思われた。こうして何度か指導すると、喫煙による遅刻は目に見えて減った。適当にあしらえるかのようでいて実は手ごわかった担任とテヨンは、ほぼ一日も欠かさず言い争いながら戦争を続けた。

３．どんでん返しの修学旅行

２年生の１学期の中ごろ、生徒たちが待ちに待った済州島への修学旅行が近づいた。修学旅行の二日目の夜はクラスの親睦会を開き、最終日は２年生全員がクラスごとの芸を披露するというふうに日程が組まれていた。私はこれをチャンスだと思い、生徒たちにテヨンとヨンホをクラスの代表として出場させ、賞を取ったことのない二人に賞を取らせようと提案した。またの名を「テヨンとヨンホを人間に生まれ変わらせるプロジェクト」で、二人がメインで歌を歌い、その他の生徒たちはバックコーラスをするという内容だ。生徒たちは特に反対もせずに応じ、テヨンとヨンホもまんざらでもない表情だった。

かくし芸大会当日、２年生全員が集まった講堂でテヨンは普段とは違い、すっかり緊張した面持ちだった。後ろでクラスの友だちが応援しているから、緊張せずにがんばれと励ました。ミュージカルを披露するクラス、ダンスを披露するクラス、ビートボックスを披露するクラスなど、生徒たちも修学旅行を一生の思い出にするため満を持して準備したようだ。それに比べて私のクラスはかの有名な悪童のテヨンの歌とは…。それでも順番が回ってくると、打ち合わせどおりクラス全員が静かに舞台を埋め、手を取り合いながらハーモニーを奏でた。その姿を見ていた私は担任として言い尽くせない感動を覚え、その瞬間はどんな問題を起こしてもすべて受け入れられるという言語道断な（？）決意をするほど、生徒たちがかわいくいじらしく感じられた。私のクラスは２等に輝き、賞金としてテヨンは商品券をもらった。

大会終了後、テヨンは私に先生のおかげで賞がもらえたと挨拶した。そして商品券を先生の個人のお金と変えてもらえれば、そのお金でクラス全員にお菓子を買ってあげたいと言った。友だちへの感謝の気持ちがほほえましく、その提案を快諾した。これをきっかけにテヨンはクラスの友だちと日常を分かち合う生活を楽しむようになり、学校に戻ってからも友だちの機嫌を損ねまいと、自発的に荒っぽい行動と悪口雑言を減らす努力を見せた。一瞬一瞬、口汚い言葉が出てく

るたびに女子生徒が「教室で悪態をつかないで！」と言うと、鼻白んで悪態をやめて周りの様子をうかがった。生徒たちは共に生きる同世代の子どもたちからより多くを学ぶ。互いに見て成長できるよう、教師はクラスの雰囲気を細かく把握し、状況による環境を適切に作り上げることで最大の教育効果が得られるということを改めて体験する良い機会だったと思う。

４．できることを探す

生徒たちは、成績を通じて自信とアイデンティティーを得ようとする。しかしテヨンのように最下位を走る生徒にとって、これはほとんど不可能に近い。学校の勉強と成績というものは、一生懸命努力したからといって簡単に解決できる部分ではない。幼稚園から蓄積された学習の欠落が、ほんの１～２年の努力で埋められるはずがないからだ。

ある日、１学期に 10 時間、１年に 20 時間、学校の奉仕活動として認められる「節電ヘルパー」をテヨンが買って出た。節電ヘルパーは特別室での授業や体育の授業の際、教室を最後に出て電気と扇風機とテレビを消していかなければならない。これをやりたがった生徒が多く、競争は激しかった。じゃんけんで決めるようにしたが、テヨンが友だちに頼み込んだため友だちも同意し、結局テヨンが節電ヘルパーをすることになった。テヨンはこれを理由に戸締りの後トイレに寄ってたばこを吸い、授業に出られる絶好のチャンスだったため、ここまで切実に節電ヘルパーをしようとしたのだ。私はこの理由を知っていたが、知らないふりをした。毎時間タバコが切実だったテヨンは、怖ろしいほどの「責任感」で驚くべき能力を発揮した。本当に徹底してヘルパーの役割を一度も欠かさず誠実に務めた。テヨンにとって喫煙と節電ヘルパーは二兎を得られる絶好のチャンスで、そのおかげで私のクラスは教頭先生に電気をつけっぱなしで授業に出たという小言をまったく聞かなくなった。これに関してだけは理由がどうであれ任務に忠実だったため、約束どおり生活記録簿にすべての活動を細かく記録した。１年生の時、悪口雑言と乱暴な行動で周りを悩ませたあのテヨンと同一人物とは思えないほど、テヨンは少しずつ変わっていっていた。こうして少しずつ変わる子どもの姿を約束どおり余すことなく生活記録簿に前向きな変化として記録し、これを確認したテヨンも約束を守る担任として信頼して１年間、よくついてきてくれた。

５．参加する心を育てる

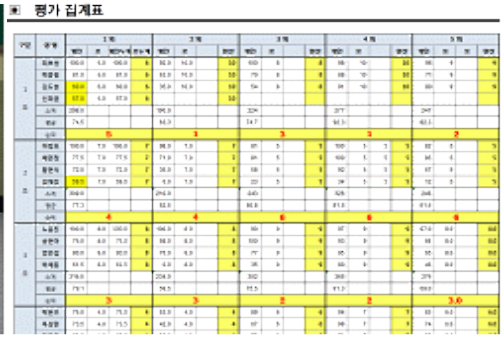
私は今年、高３物理クラスの担任になり、物理Ⅱクラスは２年生の時のように相変わらず両極端なクラスになった。全校１、２位を争う最上位圏の生徒数人と、テヨンをはじめ人間関係で結束した最下位圏の生徒だ。私のクラスの授業に入る教師たちはみな、仕切りを張って授業がしたい、どこに焦点を合わせればいいのかわからないと愚痴をこぼすほど、成績の格差が激しい。生徒たちは日に日に大学入試のための勉強に忙しく、去年ほどの余裕がない。ますますやることのなくなったテヨンは毎時間、居眠りをすることが増えた。このままではいけないと思い、物理の時間には班別に授業を進めることにした。まず生徒たちに評価に対する意見を聞いた。

「パフォーマンス・アセスメント 50%のうち、参加度 10%は毎週行う入試特別講義のチャプター別試験を、80%は個人の成績を、20%は班別の合算点を見ようと思っている。これを君たちに賛同してほしい。こうしなければ、ついていけない子は投げ出してしまうだろうし、そんな雰囲気では成績のいい子も力を発揮できないから、お互いにゼロサムゲームになるしかない。一緒に進むのが最後まで行ける道だから、こういう方法を考えたの。同意してくれるでしょう？」

生徒たちは特に動揺することもなく、素直に受け入れたように見えた。生徒たちはする、しないではなく、自分の班に誰が入ってくるのかを話し合った。成績を見て平等に分け、班ごとの平均が同じくらいになるよう組んだ。私のクラスは２年生の時に物理で１、２等級を取った生徒が全員そろっていたため、生徒たちの等級への熱望はすさまじい。そして物理にかけては最高であ

りたい生徒が多いため、成績の結果にかかわらず実に熱心に取り組む。やりたくなくても、また投げ出したくても、自分のために同じ班のできる子に迷惑をかけるのではないかと、テヨンでさえ班別評価を見る日が近づくと、前日から勉強すると騒ぎ出す。最初のテストで、テヨンは答案用紙を見て私に怒った。

班別学習



班別学習のエクセル表

「先生、僕はトンネル内での電車の加速度の問題が出るかと思って一日中覚えたのに、なんで出してくれなかったんですか？書くことがないじゃないですか。」

呆気にとられはしたが、それでも友だちに迷惑をかけまいと努力する姿がいじらしく、テヨンが「物理ごとき」を勉強したと、友だちの前で盛大に褒めた。テヨンだけでなく、毎時間居眠りをする生徒も班別評価だけは熱心に取り組む。また、班別の活動には敏感な男子生徒が多く、テストの後はすぐに採点をして知らせてほしいと集まるなど、たいへん積極的だ。教師はこうして積極的に参加する生徒たちの姿に感動し、エネルギーを得るようだ。このような授業がきっかけとなり、テヨンは前回の中間テストでは出題されるだろう叙述型の予想問題を友だちに聞き、その問題の答えを懸命に覚えたという。

叙述型１． 一定量の気体分子が図のように仕切りが張ってある空間に入っている。
質問に答えなさい。[4.0 点]

(A)　　(B)

(1)　４個の空気分子が全部(A)に集められる確率を計算しなさい。[2.0 点]

(2)　気体分子が両側の空間に行渡る時の確率は８分の３で一番大きい。これを熱力学第２法則と関連させ説明しなさい。[2.0 点]

<中間テスト　問題 >

「自然はエントロピーが増加する法則で作用する」

読文（読書と文法）の時間にテヨンが何かを熱心に覚えていたため、担当教師が

「テヨン、どういう意味かわかって覚えているの？エントロピーって何？」

「わかりません、ただ覚えています…。人の名前？」

担当教師と生徒たちはテヨンの答えにしばらく爆笑しながら、それでも眠らずに何かをする姿がいじらしいと褒めた。テヨンは中間テストの期間中、その一文を熱心に覚えはしたものの、そ

の答えをどこに書けばいいのかわからず、すべての叙述型問題の解答欄に書いた。覚えたものが相当もったいなかったのか、しまいには「幾何とベクトル」の科目の答案用紙にもこの答えを書き、教師たちを大いに笑わせた。

あきらめないという気持ちは本人の意志にもかかわるが、むしろ周りの人間の本人を切り捨てないという意志がより強ければ、本人もあきらめずに頑張るのだということがわかった。生徒たちがあきらめずに一つでも覚えて良い点数を取りたいという意志さえあれば、それは必ずしも勉強である必要はない。これとおなじような努力さえあれば、これから社会に出てもどんなことでもできるだろう。テヨンとの経験は私にそんな信頼を与えてくれた。

Ⅳ．おわりに

聖書に「迷える子羊」の例えがある。羊飼いが群れからはぐれてしまった一匹の羊を探し旅立つという内容だ。迷える子羊の立場としては羊飼いのこうした行動は当然ありがたいだろうが、残された羊たちはどう考えるのか気になる。なぜ私たちを置いてたった一匹の羊を探しに行ってしまうのか、なぜそんなに無責任なのか、はぐれた一匹より残された私たちの方が多いではないか、なぜ集団行動をしなかったのか、など考えてみる。しかし羊飼いのこのような行動を見る残りの羊たちも、表面では不満を表しながらも、心の中ではそれとなくありがたいと思っていることだろう。私もいつか迷える一匹の羊になった時、羊飼いが私を切り捨てずに探しにきてくれると信じられるから。

選択と集中、効率、競争を通じた発展などが韓国社会を支える主流の価値だ。教育も学校の成績を通じた画一的な競争方式から脱することは難しい。学校では勉強がよくできる生徒だけが誠実、有能、甚だしくは善良である。南北の対峙の雰囲気の中、「貧乏脱出」、「先進国進入」という崇高な大義の道に迷う子羊一匹、二匹ぐらいは失っても良い存在であった。しかも多数の秩序を乱す「不従順な羊」として処罰の対象にもなった。

どんな命も切実でないものはひとつもない。ひとつの命は宇宙より広くて尊い。切実な命を守り尊重するため国家、社会、学校、家族ができたのだろう。その価値を超えてはどんな論理も有り得ないと思う。前だけを見て走って来た私たちはこれを忘れている。

高校３年の最後の夏休み、悪童たちが反乱を起こした。自ら学校に補充授業に出る、最後の学習体験をするため学校に出るという。学校に来て、クラスのみんなと一緒に５等級を目指して数学の勉強をするというのだ。テヨンを指導する先生は同じクラスの友達でたった一人の生徒も切り捨てないという教育哲学をもって教育大学進学を目指す子だ。あえて教えなくても生徒たちはお互いの大切さを学ぶ。

一人も切り捨てない教育という価値の核心は、信頼と切実さではないかと思う。数多くの人生の多様な価値を１～２つほどの基準に当てはめられない人間の多様性への肯定、そして今は違っても、いつかは花開くであろう潜在的な価値への信頼ではないか。現在の教育現場に困難が多くても、今できることを実践することによって価値を守れば、いつかはこうした価値が一般化されるのではないかという希望をもって切実に信じてみる。

（訳：韓国側　補足　吉川）

20 回　埼玉交流会　　アンケート

1　今度の交流会の日程で一番印象深かった行事は何ですか？

2　今度の交流会で一番楽しかったことは何ですか？

3　今度の交流会に対するご感想をお書き下さい。

4　次期の交流会に望む点は何ですか？

韓国側

1．　今度の交流会の日程で一番印象深かった行
事は何ですか？

○　一つになったレセプション
○　崔成学（チェソンハッ）先生の授業報告
○　報告会 + 反省会
○　1）私にとって良い点はいっぱい読むこと：一人の教師の世界観、教育観、価値観がどんなふうに子どもたちに影響を及ぼすのか分かるようになった。　2）　授業報告：テーマを貫く互いに異なる 4−5 本の報告(特別報告を含む)は多様性と実践という観点で楽しく、真剣な学びの時間だった。
○　丸木美術館－原子力発電〔ママ〕のむごたらしい姿を、絵を見て、実感した。その危険に対する警戒心が起きました。
○　延々９時間にもわたるマラソン授業報告、そして、午前 2-3 時までにわたる深い対話
○　やはり、授業報告。授業発表を準備するために長くは１年、短くても 3-4 か月、悩んでいらした先生方の姿は尊敬に値する。失敗を恐れない態度は他の先生方への信頼があるからこそだったのでしょう。また、一人の生徒も切り捨てないという気持ちがあったので、そうできたのでしょう。
○　高麗神社の訪問は単に遺跡を訪れるというよりもっと重要な感じがする。渡来人の記録というよりは住んでいる子孫を知ることで、外部から来た者が帰化し、一緒に生きていく一つの形を見せてくれるものとして高く評価される。
○　イジョンスク(安養、忠勲高等学校)先生の授業発表です。自分なりに計画－実行－報告が体系的になされており、内容的にも成功した事例(case)だと思います。

○　丸木美術館訪問：とても暑かったが、理由のある暑さで大丈夫でしたし、絵を見て感動、特にからすの絵。死んでも差別された人々
○　1)一人も切り捨てない教育のための先生方の熱情が溶けあった授業報告
2)幻想的な公演を見せてくれたレセプション
3)韓、日の先生方の気の発散の二次会

○　1)韓国側、日本側先生の授業報告、４つの授業報告がすべてとても特別で意味がありました。2)丸木美術館観覧
○　交流会の 20 年を振り返ってみる時間と丸木美術館のフィールドワーク

２．　今度の交流会で一番楽しかったことは何ですか？

○　8 月 3 日夜の韓日の二次会
○　風呂とレセプションの発表
○　反省会で、会員たちの生き生きした意見をたくさん交わすことができた。
○　日本の先生方に会うのはいつも楽しい。全てが楽しかったが、私は互いの話を聞く時間－報告会の自由討論、夜の自由な話、レセプション後の話し合う時間などなどーが最もよかった。
○　授業発表+質疑応答（かつて考えることができなかった観点の話を聞くと、興味がわき、考える材料が得られてよかったです。）
○　新しい先生方との出会い、そして話
○　すべてが楽しかった。準備する方たちはびっくりされるでしょうが、2 回したらもっとよかったのにという気がするほどとても楽しかった。朝起きて、食堂に向かう時から、夜一緒に話を交わし、杯を合わせる時まで。
○　新しい会員たち、参加者たち、みな純粋だが、自分の方向を正確に理解しておりよかった。
○　レセプションで韓国、日本両方の会員らが一つの心、一つの思いで交わり、歌い、踊り、話をたくさんしたことです。特に私にいろいろ教えてくださった波多野先生に感謝申し上げます。
○　ラルラルラ、チョア、チョア　チョア～！ヨンドゥブ　合唱！
○　スケジュールが余裕あるように進められたので、楽しく参加できたこと。
○　1)韓国側会員たちとの会議及びモイム：多様な討論が楽しかったです。2)レセプション：いつもそうであるように「興」があって楽しかったです。
○　日本、韓国側教師たちが一緒に一つになり、レセプションを楽しんだ時間

３．今度の交流会に対するご感想をお書きください。

○　両国の生徒たちの人権と痛みを心配し、苦悩する先生方の心のこもった発表と討論、親切で詳しく案内してくださったフィールドワークの案内の方々、みなが一つに交わったレセプションが交流会の目的と意味を確認させてくれました。
○　多様な考えを持った人々が集まって交流をし、考えの幅が広がった。

○　福島の子どもたちをどのように世話をし、教えるかより、根本的な原因を探究する研究会になったらよかったのですが。
○　いつもたくさんのことを学ぶためにずっと期待してわくわくする。交流会を通して刺激を受けるこのピリッとするのを周りの方と分かち合いたい。全体の反省会で、授業報告及び協議の時に物足りなかった議論をもう少し続けることができ、やはり「素敵」という満ち足りた気分を感じた。残しているのは、私の実践である。
○　日本の先生方の親切に感動しました。
○　韓日両国の先生方の熱情に本当に大きな感動を覚えました。
○　会を重ねるにつれ、先生方との距離が縮まる。特に、今年は 20 回目の交流会だ。過ぎ去った時間とこれからの時間を考え、私が何をして、何を準備しなければならないかが分かるようになった。残念な点は、韓国側初代会長をお連れできなかったことで、根がなく立っている感じだった。
○　遠藤先生が健康の問題でいらっしゃれなかったのはものすごく（今までにない）悲しい感じである。両方の求心点になる交流の役割を遠藤先生がたくさんしてこられたのを確認することができ、早い回復を願う。
○　よく組まれた計画どおり無理なくよく構成されていました。テーマもたくさん考えさせることだったし、丸木美術館で戦争と平和とは何なのか？また、実践方法は何なのか悩みました。
○　熱心に学んで、通い、聞くことができてよかったし、朝鮮学校の発表、福島から来たＡについての話と出会って、新しく感じられました。
○　やはり期待以上!!!
○　一人の子どもも切り捨てない教育は、実際にはとても現実的に難しく、生徒を「受け身」の位置に、教師を「能動」の位置に置くものではないかという思いがしました。しかし、切り捨てない教師の努力と実践を通して生徒たちも自分の生と幸福をあきらめないようになるということを先生方の実践を通して分かるようになったようです。
○　日本側の授業報告の教師が若い層に変わったが、少しずつ世代交代しつつあるという感じ。

４．次期の交流会に望む点は何ですか。

○　それとなく宿舎の部屋割りについての情報を知らせていただけたらよかったのですが。（例：日本の先生と一つの部屋を使いながらしようと思っていたことができなくて残念でした。）
○　政治的、意図したことよりは、どんな変化が個人の生活に影響を与えたかについての具体的な実践報告があったらよかったのですが。
○　1）討論時間をもっと多く確保すること　2）レセプションの時間を短くして、その分もっと真剣な対話をすること
○　真摯な実践（それは必ずしも学校である必要はないだろう）報告と協議の時間がもう少しあったらよかったのですが。

○　授業発表の後に自由時間(休み時間)があって、テーマについて隣に座っていた先生方と話せる時間があったらよかったのですが。
○　日本側先生方ともう少し深みのある話を交わしたかったです。
○　１年間、新しい会員を、特に若い会員をたくさん受け入れて、変化した教育環境についての直接的で能動的な考えと実践を交流会で報告できるようにしたらよいのですが。

○　日本の会員たちの若い世代の流入が切実に必要だと思う。日本の伝統舞踊、宴会、文楽など今回のように伝統を理解できるイベントがあればよいのですが。
○　フィールドワークを強化し､現場をより多く経験するようにしたらどうだろうかと思います。
○　元気でまた会うこと。
○　多くの日本の先生方が韓国に来られたらよいのですが。フィールドワークが交流会のテーマと直接の関連があればよいのですが。
○　テーマに合う授業報告も重要だが、内面的にもう少し深みのある授業背景が必要だという思い。

５　その他

○　日本の伝統文化についての紹介の時間がよかったです。　次にも期待します。
○　愛しています。
○　今後とも仲良くしましょう。
○　20 年を整理して、今後の 20 年を準備して実践する考えの交流を、ｅメールなどでやり取りし、その結果を整理したらよいのですが。
○　韓国と日本の生徒たちが一日を過ごす間の授業外の給食、制服、登下校時間、補習、夕食時間、中等以上の生徒のアルバイト文化などを比較してみる研究発表があればよいのですが。
○　さらに交流会がより発展することを期待します。
○　遠藤先生が健康を回復されることをお祈りいたします。韓国側で発表したヒョンスク、ジョンスク、ミンギョン先生、ご苦労さまでした。たくさん学ばせていただきました。ありがとうございました。
○　日本の先生方の主催者側としての努力と配慮に感謝いたします。
○　アフターは各国別で独自に解決できる力が育っていたらよかったのにという意見。

（翻訳・記録：佐藤）

ウリ 94 号　2014 年 10 月 10 日
日韓合同授業研究会
〒102-0074　東京都千代田区九段南 3-9-11
マールコート麹町３０３
吉峯総合法律事務所内
事務局連絡先
E-mail　larribee1991@yahoo.co.jp
会費納入先
郵便振替 00170-1-428530